

## [社 会]

# 歴史を学ぶ意味を実感する「物語り」 －思考ツールを活用した歴史実践を通して－

西塚 智行\*

### 1 はじめに

平成30年度の学習指導要領の全面改訂に向けた中央教育審議会の答申では、アクティブ・ラーニングの推進が強調されている。アクティブ・ラーニングとは「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」とされており、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろん「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視し、知識・技能・思考力を定着させるうえでも、学習意欲を高めるうえでも効果的だと意義付けている。

思考力を高める手法として、「思考ツール」の活用も主張されつつある。田村学は、『「思考ツール」の授業<sup>1)</sup>』において、「明確な意図をもって思考ツールを用することで、期待する具体的な思考力を発揮する子どもの姿が実現され、子ども一人一人の思考力が育まれていく」と述べている。

筆者も拙論「児童が思考を整理しながら学習を進め、社会的思考力を高める授業<sup>2)</sup>」において、フレームワークを用いた授業を行い、児童の思考力を高めることを実証してきた。フレームワークは、思考ツールとも呼ばれ、教育界では、後者の方が一般的に用いられている。資料を「比較する・つなげる方法」、「原因や背景の探り方、事象間の関連づけ方を意識した活動」を行うことで、子どもは、課題に対する解決策を得るための手順や自分なりの適切な考えをもつことができるようになる。これは、思考する道筋を子ども自身が習得した姿であり、アクティブ・ラーニングの理念につながるものといえる。思考ツールは、課題を解決するための思考スキルを身につけたり、アイデアを出したりするためのアクティブラーニングの一つとして有効であり、今後、社会科のみならず他教科や領域において応用可能な汎用性の高い指導法として期待されている。

さらに、今後一層、生きる力の育成が重視される中で、その場だけの問題解決能力だけでなく、人物と自分や生活との関わりを考えたり、社会的事象を多面的にとらえたりして判断し、思考し、表現する力を育成することも必要である。授業においては、自分のこととしてとらえることができる確かな「振り返り」の場の確保と充実が重要となる。歴史学習なら歴史的事象を自分事としてとらえる、いわゆる「歴史を学ぶ意味」(現在の自分たちの生活や国家・社会との関わりを考えたり、現在及び将来の発展に生かしたりすること等)を実感させることが肝要と考える。

### 2 問題の所在

これまでの歴史学習の振り返りでは、主にストーリーを重視してきた。ストーリーでまとめると「関ヶ原の戦いに勝利した家康が、江戸幕府を開いた」のように史実を並べ、そこに「すごい」「えらい」といった表面的な感情をプラスした振り返りになることがよくある。これでは、「歴史を学ぶ意味」を実感できていないといえない。

言語哲学者の野家啓一は「物語の歴史<sup>3)</sup>」において、「過去の事実をありのままに描写することはできない。歴史学者といえどもできることは、文献資料や古代的資料を駆使して、過去のできごとを『解釈的に再構成』すること、すなわち『物語り』することだけである。」と述べている。数多の歴史的事象の中から「とある歴史的出来事」が、のちのちまで人々の「記憶に残る歴史的出来事」になるには「物語り」されなければならないとしている。

「物語り」とは、複数の史実をストーリーではなく、プロットでまとめることである。史実を時系列に「記述・描写」するのが、ストーリーである。一方で、複数の出来事の間因果関係を時間的・空間的順序に沿って解釈し、自分なりに再構成するのがプロットである。この史実や人物を因果関係でつなげ、自分の言葉で再構築する「物語り」は、小学校の歴史学習においても、子どもが「歴史を学ぶ意味」を実感するためにも有効なことであると考えられる。

そこで、従来活用してきた思考ツールに加え、小学校社会科の歴史学習においても野家の視点を取り入れ、「なぜ、

\* 新潟市立山潟小学校

なぜなら」といったプロットで歴史を再構成する「物語り」を振り返りに取り入れた授業を展開していく。そうすることで、歴史的な事象が単なる暗記ではなく、当時の人々の生活や営みの蓄積であることを認識し、共感的に理解できるような思考力を育てることができると考える。

また、この「物語り」を小学校での社会科授業に取り組み意義を次の3点から説明できる。1つ目が、プロットでとらえる「物語り」は、複数の出来事の因果関係を時間的順序に即して「説明」しており、「なぜ」という問いに答えやすいからである。事象を多面的にとらえ、検証するといった思考力をより確かなものにしてくれる。2つ目が、表現活動によって、主体的・協働的な学びを構成することを容易にすることである。特に、これまで一斉学習や個別に使うことが多かった思考ツールを小グループでも活用しやすくなる。3点目が、「歴史を学ぶ意味」を実感できることである。歴史で存在する因果関係を客観的にとらえるだけでなく、その人の生き様や思い・願いを自分に重ね合わせながら考えることができるのである。そうすることで、我が国の歴史を尊重したり、未来を切り開いた日本人の思いと歴史的な事象が結びついたりしていくのである。

### 3 研究仮説と研究の方法

本研究では、以下の仮説を立て、実践から検証していく。

様々な思考ツールを協働的に使って、「歴史を学ぶ意味」を実感するような「物語り」を授業の振り返りの場面に取り込んでいくことによって、児童は、歴史的な事象を多面的にとらえたり、当時の人物や考えを深く受け止めたりして、「歴史を学ぶ意味」を深く実感し、「我が国の歴史を大切にしたい」という心が育つだろう。

以下の手立てをうち、「歴史を学ぶ意味」を実感し、「我が国の歴史を大切にしたい」という児童を育てる。

#### ① 社会事象を多面的にとらえるための思考ツールの協働的な活用

思考ツールを使った協働的な学びを行うために、授業中の意見の交流場面に「ファシリテーション」の手法を取り入れる。ファシリテーションとは、「組織が目標を達成するために、問題解決・合意形成・学習などを支援し促進すること。また、そのための方法」である。ファシリテーションの手法を生かし、グループで思考ツールを用い、協働的な学びに対する意欲を高める。みんなで学び合い、考えを整理し、多面的な見方や考え方を育てる学習過程を設定する。

#### ② 時代や人物を深く受け止めるための「気概」を重視した「物語り」の作成

児童が「物語り」をしたいと感じるのは、人物の偉業やエピソード、さらにインパクトのある歴史的な事象に出会ったときである。それが身近な存在であれば、更にその気持ちは高まる。これまでも、人物の肖像画や伝記、年表、エピソードを活用し、児童の興味・関心を高めてきた。

本実践では、人物のエピソードや当時の人々の願いや働きを「気概」と定義する。我が国の国家・社会の発展の基盤をつくるために尽力した人々の生き方は、児童にとっても共感できるものであり、「気概」と定義することで、それらの人物の働きをさらに誇りに感じることができる。気概と歴史的な事象から生まれる「物語り」を通して、児童が歴史を学ぶ意味を自ら気付くようになることを考える。さらに、「気概」に触れるために、並行読書を行う。学級内図書を整備し、教室内に各時代に活躍した人物の伝記や学習マンガなどの準備をする。

#### ③ 3つのステップで「物語り」

小学生においては、因果関係をとらえることが最も難しい。史実を結びつけるためには、視点を与えたり、個別に支援したりする必要がある。そこで、「物語り」を生み出す以下の3つのステップを繰り返し指導する。

- ・その時間のキーワードを共有する。2～3つのキーワードを入れて「物語り」をつくる。
- ・「だから」「なぜなら」「よって」など、理由を示す接続詞を使って考える（文章内では、省いても可とする）。
- ・基本は3文でまとめる。「史実—理由（根拠）—まとめ」の文を書く。

### 4 実践例

(1) 単元名 3 近代国家への歩み 小単元 「新しい時代の幕開け」(教育出版)

(2) 単元の目標

○黒船来航から国会開設までの社会や政治の移り変わりについて、明治維新、文明開化における具体的な諸改革を絵画資料、写真、年表、エピソードなどから読み取ることを通して、欧米の文化を積極的に取り入れ急速かつ大胆に近代化を進めていったことを理解させる<sup>4)</sup>。

### (3) 本研究での考察材料

本研究は、6学年1クラス34名の児童を対象に行った。「歴史を学ぶ意味」を実感したかどうかは、授業中の発言やノートの記述内容、児童の変容などでその姿を追う。さらに、事前アンケートと学習後のアンケートの比較から、児童の認識の変容を分析する。

### (4) 単元について

単元を構成するためのキーワードは、「調べる（活動）」「気概（中核となる考え）」「近代化（目的）」である。ここで「調べる」とは、明治の社会の仕組みについて調べ、明治の人々が情熱を持って日本の近代化を進めていったことが分かるようになることである。

次に、「気概」である。明治時代で特筆すべきは、人々が、現在の私たち日本人では考えられないほどに活力にあふれていたことである。外国の勢力に驚き混乱しながらも、「我々も黒船を造ろう」「鉄道を造ろう」などと、欧米化の波に負けず、むしろ時代の流れを生かして、近代化へ突き進んでいったのである。ペリーの肖像画と和製黒船造り、岩倉使節団のちょんまげ姿の岩倉具視の写真、板垣退助の「板垣死すとも自由は死せず」などの言葉、創立143周年を迎えた現任校においては校舎用地を寄付して下さった地元の方々など、新しい国や人をつくるという当時の人々の熱意こそ「気概」であり、そこに児童は共感し、意欲的に「物語り」するようになると思われる。

近代化については、この単元では児童がとらえやすいように「欧米の進んだ文化や政治の仕組みに追いつくための過程」と定義する。欧米に追いつくことが、条約の改正につながるという柱を確実に押さえる。

### (5) 指導計画、思考ツールの活用場面<sup>4)5)</sup> 全10時間

時	学習活動	観点	思考ツールの活用
1	○まちの風景が変わった 横浜の様子を表した絵図と写真を比較し、新しい時代になってどのような変化があったのかを考え、学習問題をつくる。	関	
2	○黒船が来た 黒船やペリーを描いた絵から、当時の人々や幕府の反応を予想し、開国が幕府や社会に与えた影響を話し合う。	考	開国か、鎖国の継続かを、複数の立場で考えるためにYチャートを使って話し合う。
3	○江戸幕府がたおれる 開国後の人々の暮らしや考え方の変化を調べ、江戸幕府が倒れるまでの過程を大塩平八郎や生田万の乱を中心にその要因を整理する。	知	幕府が倒れた要因をマトリクスを使い、倒幕から大政奉還までの流れをグループごとに分析する。
4 5	○新しい政府をつくる 新政府の政策を調べ、明治維新によりどのような国づくりを目指したのか考える。岩倉のちょんまげから新しい国づくりへの気概を読み取る。	技 考	明治政府の近代化とちょんまげを、フィッシュボーンを用いて結びつける
6	○西洋に追いつけ 「鉄道が走るまちの様子」をもとに、人々の暮らしや政治がどのように変わっていったかを調べる。	技	地租改正や殖産興業など諸改革を進めたことをピラミッドチャートでグループごとにまとめる。
7	○人々の暮らしが変わった 江戸時代と比較しながら、人々の暮らしがどのように変化したか、人々の考え方がどのように変わったかについて調べる。	知	文明開化の様子をクラゲチャートでまとめる。3年生での地域の学習と山潟小学校の創立当時の様子結びつける。
8 9	○自由民権運動が広まる・国会が開かれる 板垣退助と新潟の山際七司がどのような運動を行ったのかを調べ、人々がどのような政治を求めたかを調べる。	考	
10	○明治政府の今後 人々が考えた憲法と明治政府が発布した憲法を比較し、明治政府が目ざした国づくりはどのように達成されたのかを説明する。	技 考	自由民権運動の起こりから国会開設までをポジショニングマップを使ってまとめる。

※評価の観点： 関・・・社会事象への関心・意欲態度  
技・・・観察・資料活用の技能

考・・・社会的な思考・判断・表現  
知・・・社会事象についての知識・理解

## 5 指導の実際と考察

### (1) 「開国か、鎖国の継続か」での思考ツールを協動的に活用した「物語り」（第2時）

教科書にある「日本人がえがいたペリー」、「ペリーの肖像」、「ペリー艦隊と防備を固める人々」の順で資料を提示した。デフォルメされたペリーと実際のペリーを比べることで、どうしてというずれが生まれる。その後、「ペリー艦隊と防備を固める人々」を提示することで、当時の緊張感をとらえることができる。導

#### 《ペリーの肖像画と黒船来航の様子を見ての話し合い》

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| T | 絵を見て分かったこと、気づいたこと、考えたことは何ですか。 |
| C | ペリーの顔がてんぐみたい。こわいよ。            |
| C | 全然違うよ。どうしてあんな風に描いたのかな。        |
| C | 武士が、戦いの準備しているよ。               |
| C | あんなに大きな船と戦うのかな。勝てそうにないよね。     |
| C | 日本は鎖国をしてきたのに、ペリーは、何をしに来たのだろう。 |

入の話し合いから、日本はペリーにどのように対応したかについて興味を持つ児童が多く出た。児童の興味を生かし学習課題を次のように設定した。

(学習課題)

黒船の来航に、どのように対応したのだろうか

Yチャートを用いて幕府側、他の大名や武士、第三者の立場の対応を考えた。1グループ4～5名に分かれ、まず、既存の知識や想像したことなどを1枚の用紙にみんなで自由に書いた。ここでは、意見の拡散を重視した。その後、出た意見の整合性を教科書や資料集を使って確かめていった。その後、史実の確認や意見をつなげ、意見を収束させた。さらに、一人を残し他のメンバーが別のグループへ情報収集に行く時間を設定した。残った一人は、ホストとして自分たちの話し合いの内容をゲストに伝えた。その後、情報を得たメンバーは自分のグループに戻り、新たな情報を伝え合い共有した。この活動により、自分たちのグループでは気づかなかった視点を獲得することができた。

《Yチャートでの話し合いの様子》

〈幕府側〉

- C 幕府は、海外の情報や貿易のうけを独り占めできなくなる。開国したくないはず。
- C 幕府は、今までの江戸時代が壊れるから、鎖国を続けたいと思っている。
- C 戦うような絵だけれど、負けたら恥ずかしいよ。強すぎて勝てない。
- C 日本の周りの国は、植民地になっている。断ると大変なことになるかもしれない。

〈他の大名や武士〉

- C 外様大名や江戸幕府をよく思っていない武士は、開国してほしいと思ったにちがいない。
- C ペリーと組んで、幕府に対抗できる力がつかもかもしれない。開国してほしい。

〈第三者〉

- C 文化が進んでいそうなので、新しいことが学べると思った人もいたはず。
- C 大きな大砲が、自分たちの住んでいる所に向いている。開国しないとやられる。

思考ツールを用いて協働的に話し合うことで初発の感想の「こわいから開国しよう」や「戦ってしまえ」という短絡的な読みから次第に、史実をつなげた深い意見が形成された。

ここでは、下記のような「物語り」が見られた。通常の授業では、即答できない江戸幕府に対して批判意見が多く出る。しかし、子どもが当事者の立場で話し合いをして、明確な答えが出なかったことから、江戸幕府の対応を支持する「物語り」をする児童も少なくなかった。歴史を自分のこととして受け止めたことが分かる。ここでのキーワードは「幕府」と「開国」とした。

《黒船来航と当時の人々の対応（気概）の物語り》

- 幕府が、ペリーへの返事を1年間待ってもらったことは正しいと思う。なぜなら、国内のことや海外のこと、開国するよさやよくないことがとてもたくさんある。じっくり考えたり、周りに相談して対応することが大切だと思う。
- 開国を求める人が、今後増えると思う。なぜなら、これまでの270年間耐えてきた外様大名たちにとって、開国はチャンスになると思う。力を付けて江戸幕府を倒せるかもしれない。
- 黒船が来たことは、学者や医者にとってはラッキーなことだった。幕府におこられずに蘭学以外の新しい学問や技術を学びたかったはずだ。これから開国したら、外国の人に勉強を教えてもらう人が増えていきそうだ。

上記のように複数の史実をつなげて「物語り」できた児童は、22名（66%）であった。残りの12名は、結果と原因の結びつけの整合性が不十分だったり、ただの時系列でまとめたりした振り返りだった。

(2) 新しい国づくり 「ちょんまげ」から近代化を読み取る（第4・5時）<sup>6)7)</sup>

明治政府の政策と使節団の動きを調べる時間と、児童の興味・関心を最もひくであろう「ちょんまげ」から明治政府の国づくりについて話し合う時間、合わせて2時間続きの授業を行った。

○導入場面

教科書のp.92には、岩倉使節団の写真が掲載されている。5人の中央に位置するのが、岩倉具視全権大使である。この写真で目を引くのは、その岩倉の和洋折衷な姿である。「一人だけなぜちょんまげ」「この人たちは何をしにいく

- T ペリーは、大統領の手紙を持ってきたんだよ。
- C 聖徳太子の時みたいだ。小野妹子も、隋に手紙を持っていた。交流がしたいんだ。

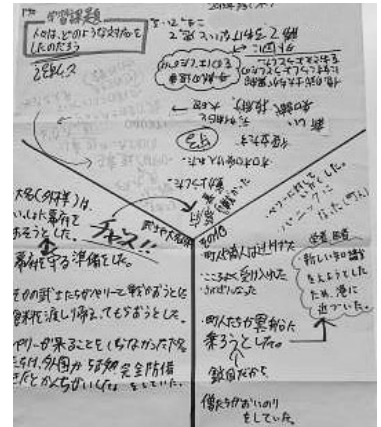


図1 児童の作成したYチャート



写真1 Yチャート作成の様子

の」「どこに行くのかな」と、つぶやいた。しかし、見送りの風景を見ると、当時の大半の人は「ちょんまげ」である。「どうして」という「ちょんまげ」に対する認識のずれが学習意欲を高めた。

### ○調べ活動の場面

思考ツールとして、課題についての要因とそれに関連した気づきを整理させやすくするためフィッシュボーンを使った。各グループで図2のようなフィッシュボーンをつくった。矢印と政策の実施年数から近代化に向けて、明治政府が次々に政策を打ったことが視覚的にとらえられた。

並行して、岩倉使節団に関する資料を提示し、使節団が何を見て、どのようなことを思ったかを話し合い確認した。使節団が見てきたビスケット工場や鉄道の挿絵を提示すると、「すごい」「このとき日本は、まだ明治が始まったばかりだよ」「日本は、遅れている」「ちょっと大変だ」と、欧米諸国と日本の文化の違いに驚く声が聞かれた。

### ○明治維新にかけた岩倉の気概をちょんまげで「物語り」

「断髪令」は木戸孝允らにより、1871年に出された。児童は、フィッシュボーンを作成することで明治政府が「廃藩置県」、「四民平等」など短期間で大胆な政策を打ち、近代国家への基礎を急速に作りあげていったことを認識している。よって、児童は髪型の近代化くらいはすぐに進むと考えていた。まず、児童はちょんまげを「日本の伝統、相撲にもある」「今だと少し恥ずかしい」など自分の生活経験や知識と合わせて考えた。しかし、明治時代の人々はなかなかちょんまげを切ることはできないでいた。

#### 《ちょんまげ騒動を調べて》

- C 「ちょんまげ離婚」であるけれど、ちょんまげを切っただけで奥さんに離婚された人がある。
- C 福井県では、ちょんまげを切ることに反対して一揆が起こっている。
- C ちょっとおかしくない。何で。
- C 新潟でも、ちょんまげの人は役所で受け付けてくれないと書いてあるよ。
- C だって、明治政府の偉い人は、ちょんまげじゃなかったよ。すぐに切ればいいのに。はずかしいよ。
- C もしかしてちょんまげって、そう簡単に切れなかったのかな。

が欧米化していく中で、児童は「ちょんまげ」を「日本人のプライド」「日本人らしいもの」「大切な伝統」「日本人の誇り」と考えた。「当時の人は、ちょんまげを残しておきたかったんだと思う」という意見も多く聞かれた。

最後に、ちょんまげを落とした岩倉の写真の提示すると、「日本の近代化のために切った」「明治政府も必死だったんだ」「全てが近代化のためだ、早く追いつかないといけない」と岩倉や明治政府の心情に迫る解釈ができた。

恥ずかしくていつまでもまげを切れない庶民と、日本のために潔くまげを切った岩倉を比較することで、自分を曲げてでも日本の近代化を急がねばと考えた岩倉の気概を感じ取ることができた。この「ちょんまげ」を切ることが気概であった。あらゆる面で新しい日本をつくる、欧米化していくことの象徴であり、「物語り」の原動力となった。

そこで、キーワードは、「ちょんまげ」と「近代化」で「物語り」をすることとした。ちょんまげと近代化を結び付けて「物語り」をした児童は、26名（76%）。インパクトのある素材は、児童の意欲も引き出し「物語り」の質的な向上が見られた。新しい国づくりを象徴する事例に、ちょんまげに関する資料提示は有効だったと考える。

次時の「西洋に追いつけ」では、「散切り頭をたたいてみれば文明開化の音がする」の歌を紹介した。文明開化の象徴が、なぜ散切り頭なのかを子どもたちは容易に理解することができた。

#### 《欧米化とちょんまげを切る岩倉（気概）についての物語り》

- 欧米訪問で、日本より進んだ街の様子や工場を見てきた。新しい日本をつくるために岩倉具視さんは、大切なちょんまげを切った。これで近代化が進んで、欧米各国に日本が追いつける。条約もなおしてもらえるようになるはずだ。
- 不平等条約を改正するためには、欧米と同じ文化や国の力をもたなくては行けない。だから、岩倉具視さんは、欧米の国々と同じになるために大切にしていたちょんまげを切った。近代化をすすめる岩倉さんの強い気持ちが伝わった。
- 西洋の国々の仲間入りするためには、全てを新しくしなければいけなかった。近代化のためには、江戸時代から大切にされてたちょんまげや着物の文化も捨てなくては行けなかった。これで欧米に追いつける。

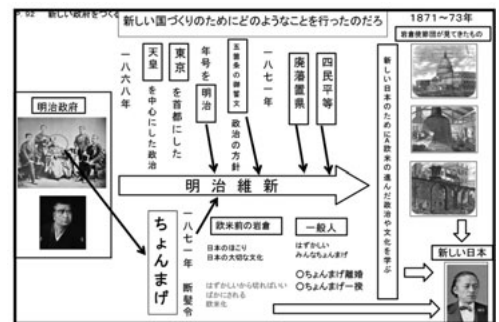


図2 板書計画

「ちょんまげ」が切れないのは、これまでの長い歴史の中で、「ちょんまげ」が生活の中に浸透していたからである。1871年ごろでは、周りはすべて「ちょんまげ」である。

その後、年表や教科書の記述に着目し「欧米に追いつく」「欧米の政治や文化を取り入れる」という使節団や明治政府の目的から「ちょんまげ」を考えさせた。

ペリー来航後、急速に近代化が進んだ。全てのもの

## 6 実践の成果と考察

本実践における手だてから見られた成果は、次の2点である。

### (1) 思考ツールの協動的活用の有効性

思考ツールを協動的に活用することにより、どの児童にも自分の考えを持たせることができた。単元終了後のアンケートでは、82%の児童が「ペアやグループで考えるのが好き」と回答した。自由記述欄には、「自分一人では、思いつかない意見でも友だちと一緒に考えることができた」、「友だちの話を聞いてたくさんのが分かった」、「別の見方があっておどろいた」など、とくに、読み取りや思考の苦手な児童が、友だちの視点や考えをもとに考えを構築していくことができた。さらに、それぞれの立場で話し合うことで、自分が当事者になって考えることもできた。不平等条約が結ばれたときには、多くの児童が悔しさを表し、「なんで」「どうして」と不満の声を上げた。その時代の人々の声を代弁した瞬間であった。

### (2) 「物語り」による「歴史を学ぶ意味」の実感について

振り返りの「物語り」は、その時間の学びを各自で価値付けるものであった。同じ史実や課題を扱ったとしても、どの立場やどの視点からとらえるかで「物語り」は変わる。児童が行った「物語り」を最後に読み合うことで、さらに、歴史の見方や考え方を学ぶことができた。「なぜ」、「どうして」という視点で史実をつなげることは、歴史を身近なものとしてとらえ、「歴史を学ぶ意味」を実感し、我が国の歴史を大切に作る気持ちを高める上で有効であった。第6時では「学制公布」により、地域の人々が土地を寄付して山潟小学校が創設された事例を取り上げた。学校の校歴室に所蔵されている明治の子どもたちが実際に使っていた教科書を見ながら「物語り」を行った。キーワードは「学制」と「地域」で「物語り」をした。その結果、90%に迫る児童が熱く歴史を語ることができた。

#### 《学制公布と山潟小学校建設のために土地を寄付した地域の人々（気概）で物語り》

○学制公布により、日本全国に学校ができた。山潟小学校は、地域の人たちの寄付によってできた。地域の人たちがこれからの日本を担ってほしいと願ったからだ。僕たちも地域の人たちの気持ちを受けつぎしっかりと勉強していきたい。

○学制公布により、政府は新しい国づくりに必要な人を育てるために学校をつくった。山潟小学校は、地域の人たちによってつくられた。外国との不平等条約を改正するためにも、いい人をつくらなければいけないと思ったからだ。昔の人は、何年も先のことをしっかりと考えていた。すごいと思った。私も、先のことを考えられる人になりたい。

○多くの子どもたちが、学制が公布されたことで学校に行くようになった。地域の人たちはここに、これからの地域を背負う人をつくるため自分たちの学校をつくった。地域の子どもたちに新しい知識や文化を学んでほしかったからだ。私がこうやって勉強できるのも、その時代の人たちのおかげだと思う。感謝したい。

さらに、授業後の「どの時代が最も大切だと思いますか」のアンケートで明治時代は、36%（事前は3/34名 10%未満）を獲得し1位となった。2位は、江戸時代。3位は平安時代であった。これは、児童が「歴史を学ぶ意味」を実感し、現在の国家・社会の発展の基盤がどこにあるのかを一人一人が考えた結果であろう。

## 7 今後の課題

思考ツールで歴史的事象をとらえる力を伸ばし、「物語り」で歴史の意味を自分なりに言語化することは、歴史学習の新たな授業モデルとして有効であると確認できた。複数の出来事の因果関係を時間的順序に即して「説明」することは、社会科では大変有効である。「なぜ?」と問いかける振り返りは、工業や情報などでも他の領域でも機能するはずである。他学年の社会科の内容においても思考ツールと「物語り」を組み合わせた実践をし、検証していく必要がある。

今後も、日々の授業研究を充実させ、多くの資料にあたり続け、魅力ある教材を見つけていく。さらに、ファシリテーションやワークショップなど、思考ツールを活用した協動的な学びによる、社会科の授業の可能性も追求し、「考え、表現する」ことが楽しいと実感できる授業を、今後も目指していく。

## 8 引用文献・参考文献

- 1) 田村学 『「思考ツール」の授業』小学館、2013年、p.17。同『授業を磨く』東洋館出版、2015年。
- 2) 西塚智行 「児童が思考を整理しながら学習を進め、社会的思考力を高める授業 ～「フレームワーク」を取り入れた歴史実践を通して～」『教育実践研究 第20集』上越教育大学学校教育実践研究センター、2010年。
- 3) 野家啓一 『物語の哲学』岩波書店、2005年、p.119。
- 4) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社、2008年、【第6学年 内容：(1)キ】。
- 5) 田中彰 『明治維新』岩波書店（岩波ジュニア新書）、2000年。同『明治維新と西洋文明』岩波書店（岩波新書）、2003年。
- 6) NHK取材班・編 『その時歴史は動いた 31』KTC中央出版、2005年。
- 7) 菊池ひと美 『ちょんまげのひみつ』偕成社、2013年。